

速水佑次郎・菊池眞夫

『岐路に立つアジアの農村経済』

Yujiro Hayami & Masao Kikuchi, *Asian*

*Village Economy at the Crossroads*, Tokyo:

University of Tokyo Press, 1981, XX+275pp.

紙 谷 貢

「奇跡の米」(Miracle Rice)としてIR系の稲の新品種が脚光を浴び、「緑の革命」(Green Revolution)という言葉が多分に期待をこめてもはやされてから、すでに十数年の歳月を経過した。この間、アジアの開発途上諸国の農業生産は、総体としては大きく前進したと言えよう。しかしながら、今なお絶対的貧困にあえぎ、飢餓の惧れにおののく人々の数が容易に減少の傾向を示さない低所得開発途上諸国の経済の現況は、かつての「緑の革命」のイメージを色褪せたものにしてしまっている。

「わゆる穀物の高収量新品種 (High Yielding Varieties—HYV)」を中核とした新しい技術の導入普及は、停滞的であ

ったアジア開発途上諸国の農業生産をスパートさせた。しかしそこには明らかに限界があったし、多くの社会的、経済的条件が農業・農村の開発を制約している事実もまた明らかにされた。また急激に与えられた経済的な刺激が、伝統的な社会に異質なものを持ち込み、それが新たな緊張関係を生み出して来ていることも事実である。かつて、HYVの出現とその普及に関し、「豊饒の角か、バンドーラの箱か」という問いがなげかけられたことがあるが、技術的な革新によって投げ込まれた一石が、伝統的な農村社会に生み出した波紋の拡がりは決して単純なものではなかったようだし、またこれからのような波紋を拡げて行くかを予測することも容易ではない。

いわゆる「緑の革命」に関わる諸々の事象、社会的、経済的、あるいは技術的な変化に関する数多くの事象について、われわれは実に多くの情報を得ていることは事実である。と同時にそれが多面的な多様な評価を伴っていることも事実である。そしてこれらの情報とマクロ的な各種の統計を結びつけて、われわれは現状を分析し将来を展望する。しかし、動きつつある社会的現象を、しかもわれわれの先進国的経験法則に根ざした開発理論をもって、異質な、そして古い伝統に培かれた社会の構造的変化を正しくとらえることは何処まで可能であろうか。

今、ここに紹介し論評しようとする速水、菊池両氏の劳作

Asian Village Economy at the Crossroads を読んで感じたことの第一は、まさに上記のことであった。評者自身、アジアの農村に屢々足を踏み入れている。しかし、それは主として特定の調査目的のために、農村経済のごく一部を撫ぜたに過ぎないものであったし、Village Life の一面を垣間見たに過ぎない。その点では、この書が長期に亘る、しかも組織的な事実の追跡の上に構築された報告であるだけに、力強い説得力を持っている。後述するように、社会的構造の差異による外部からのインパクトに対する対応の違いが明瞭に示されているし、そのinstitutionalな変化を経済学的に説明するのに、この書は成功している。にも拘わらず、外的な影響に対する村の中での、あるいは家庭の中での対応が、如何なる人間的要因によって規制されているのか、村の経済を動かすものが如何に組織されているか、更に深く突き込んで行くことの必要を感じざるを得ないのである。

感想めいたことが先行してしまっただが、先ずこの書の内容を簡単に概説しておかなければならない。この書は技術的変革を契機として生じたアジアの農村の、村落社会のコントロールする労働・土地・その他の資源が、如何なる影響をうけ、新しいコントロールのシステムによって生産や所得の分配が如何に動かされるかを明らかにすることを意図している。序章は、この

書が何をねらい、如何なる接近方法をとり、如何なる構成をとるかを、簡潔に要領よく述べている。とくに、著者は、諸種の社会的、政治的、そして経済的な要因によって動かされる社会的、経済的な構造変化という、いわば抽象化の困難な現象を経済学的な論理によって説明しようとする意図を明らかにする。

そのための道具立てとして、著者は、“institutions”を次のように定義する。すなわち、農村社会のすべての成員によって承認されたルール、と。そして、その“institutions”の改変によって得られる便益が、その改変に伴う費用を超えることによって、その社会における“institutional reform”が実現し得るとし、さらに、その便益が如何なるプロセスで社会の如何なる部分に如何に配分されるか、またそのコストが社会の如何なる部分によって如何に分担されるかを検討しようとするのである。

この書のねらいと問題への接近方法を述べる序章(第一章)を含め、この書は全一〇章をもって成る。第一部を構成する第二・第三章は、この書のコアともいえるべきもので、分析の枠組みを詳述する。第二章は、アジアの農村社会の性格を歴史的な考察の下に明確にすることから始まり、第三章における外的な近代化の動因、すなわち人口圧力、技術革新、政策の変化等が、歴史的な背景をもった社会の構造と、その社会における行動規

範に如何に働きかけるかを論ずるための背景を論述し、第三章はそのような舞台装置の下での、地主、自作農、小作農、農業労働者等の行動様式について論ずる。

第二部は第四・第五・第六の三章から成り、フィリピンの稲作中心地での調査データから、二つのタイプの“institutional change”すなわち、同質的な小農社会が借地農と又借り分益農層へと分化する“stratification”のケースと、小農社会が大農と農業労働者への分解傾向を辿る“polarization”のケースとを論じ、その差をもたらず農業構造の差を指摘する。

第七・第八・第九章から成る第三部は、インドネシアでの調査結果であり、インドネシアでは技術革新の程度の差が如何に農業構造、農村の社会構造の変化に影響するかを論ずる。技術変化の鈍いケースでは、労働の供給に比し需要の変化は相対的に鈍く、労働の所得は相対的に減少する。技術革新の顕著な場合は、労働の需要の増大によって労働の所得のシェアの拡大が実証されている。

最後の第一〇章、すなわち第四部は、第三章に論じた人口圧力、技術革新等の外的インパクトに対する対応とに関連して、第二部、第三部での具体的なケースからの主要な論点を整理し、そこからアジアの農業の構造変化に関する展望を論じている。著者によれば、アジアの農業にとっての発展への重圧とも言え

る人口増大を考慮しても、農業発展のための資源動員の可能性はかなり大きい。しかしそのプロセスにおいて、伝統的な農村社会での行動規範が働く限りにおいて、急速な社会の“polarization”への方向に向かうことは避けられるとし、在来的な社会的規範を積極的に活用する政策があれば、近代的な農村発展への自律的な成長径路を期待し得ると結論している。

アジアの農村はいろいろな意味で岐路に立っている。この書が論ずるように、アジアの農村の貧困な大衆が開発の恩恵に浴することなく益々窮乏化することになるのか。また農村社会の変化が“stratification”の方向を辿るのか、“polarization”の方向に向かうのか、である。しかしさらに大きな視野から見れば、発展のための資源動員に、どのような“political will”が働こうとしているのか、等もアジアの農村の行方を占うに必要な視点であろう。

この書の論ずる視点は、農村内部の社会構造とその成員の行動様式に置かれている。今日、われわれの最も強く求めている情報は、まさにこの内部の動きについてである。その意味で、この書はこの分野の研究に大きな貢献をしている。とくに第二章での論述に、豊富に引用され整理されている多くの人々の見解が、それなりに大きな役割を果たし、著者なりの仮説の論理的な構築を助けていることも、見逃すことの出来ない点である

し、第二部、第三部の各章に提供されている各種の情報が、論理を補強するのみならず、現状理解の深みを増すことに役立つ点には評価しなければならぬ。

さきに述べたように、第二章の農村社会の構造的特質と、その変革に伴う取引費用についての理論的分析は、この書の核心部分であろう。それは第二部第三部の実証部分を支える現実のデータにも支えられているだけに説得的である。たしかに社会経済的な変革が現実化するかどうかは、それによって得られる便益がどのように既得権的な受益層に配分されるか、に依存するのである。しかし、その社会の成員が、それぞれの置かれた地位と、在来的な生活様式の中で、それぞれに価値判断を下すとするならば、社会的な変革によってもたらされるであろう便益と費用についての判断基準には、この書で論ぜられた社会構造的特質以上のものも作用しているものとみてよいであろう。例えば、同じ稲作農村社会と言っても、稲作を補完している生業の形態であるとか、宗教的な制約とか、または著者が重視する農村社会の結合性の強さが、資源の状況、外国の経済環境によって、どう変わる可能性をもっているのか等、表面的には容易には把握し得ない事情が、あるいは容易に予測を許さない条件が他の選択を強いることもあり得るのである。

西欧的な開発理論を論ずる研究者や、開発計画の立案に当た

るテクノクラートに警告して述べた「開発努力は、常に国民の道徳的核心ならびにその国の文化および基本的価値体系の深層部とに関連するものでなければならぬ」という、国連大学学長スジャトモコ氏の言葉は、実態へのより正確な接近を求めたものである。速水・菊池両氏のこの労作が、この意味でも大きな足跡を印したことは疑う余地はないが、なお多くの学際的研究の分野が、われわれの研究の発展を待っていると言っているであろう。

なお、今日の開発途上諸国での農業の発展、新しい変革の波について見る場合に、個々の国における諸現象が、かなり政策的あるいは政治的意図によって異なって現われることに注意する要はある。フィリピン、インドネシアに関する分析については、この書の貢献はきわめて大きい。更に他の諸国については、その経済体刷、政治的配慮が、農村に対する外的インパクトをどのように制御しているかを考慮しつつ、社会的変革の経済学的な分析が客観的に行なわれるならば、アジアの農業の展望は一層充実したものになるにちがいない。